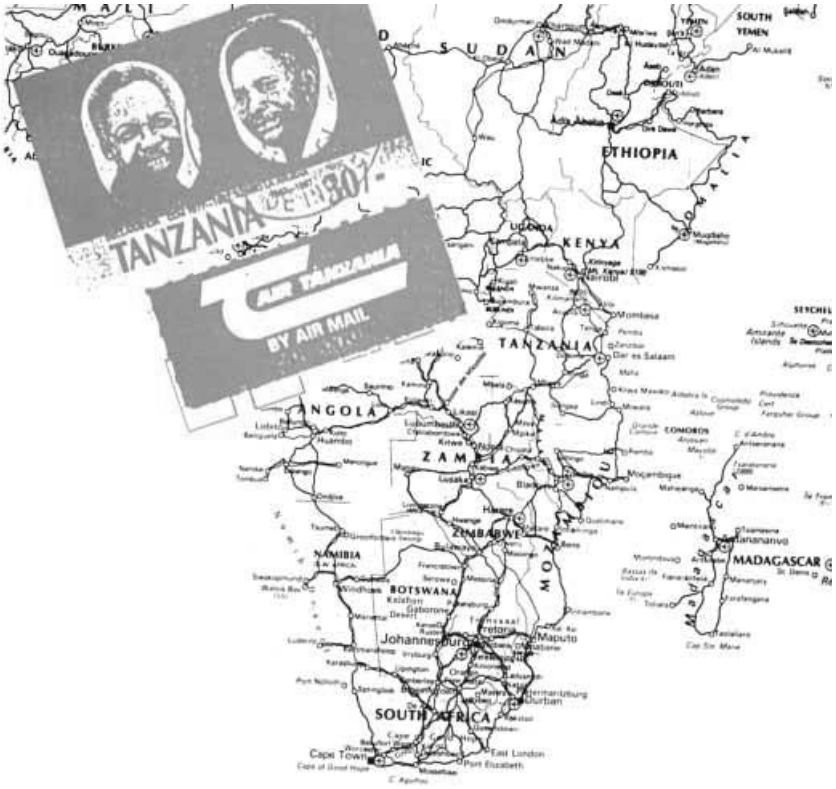
FAITH

渡辺　政直

元日本聖公会首座司教。1986年に退職後、「再度、現場の第一歩に戻り、人々への奉仕活動の道を歩みたい」という希望のもと、1987年7月、夫人とともにタンザニアのダルエスサラームに渡る。当地において、貧しい人々や、同港にある「THE MISSION TO SEAMEN」という船員のための休養施設で奉仕活動を行う傍ら、タンザニア各地の英国教会（THE ANGLICAN CHURCH）でも奉仕活動を続けている。夫人は看護婦の資格を生かし、医療奉仕活動をしている。



アフリカ便り

マコンデ彫刻

タンザニアの代表的美術品のひとつに、マコンデ族の手になる木彫りをあげることが出来る。人々は、それらの作品を「マコンデ・カービング」とか、省略して「マコンデ」と呼ぶ。特色は真黒な彫刻品だ。用材は黒檀（コクタン）だが、この木は日本の柿の木に似て表皮部周辺が白色で中心部に向って黒くなっている。本当は黒いというより濃茶褐色といった方が当たっている。でも作品はピカピカと黒光りしている。これは黒の靴墨をぬって光沢を出しているからだ。

元々、マコンデ族はタンザニアのずっと南、モザンビークとの国境周辺の高原に住んでいる。性質は温和で、飛び抜けて美術的感覚に秀れた人々だ。古いマコンデ彫刻の中には災害、病気、出産、死などにまつわる「悪霊（シエターニ）」祓いに関係するものが多い。巫女の薬入れ、悪魔祓いの踊り用のお面・槍・杖、安産用のお腹のふくれた婦人像、巫女や尊長の坐る丸型椅子の他、「悪霊」そのものを具現した像は、まるでピカソの絵に出てくるような怪奇（グロテスク）なものが多い。又その頃の用材は黒檀よりも柔かな木が用いられ、作品は木炭をこすりつけ黒色にしている。最近の作品として、タンザニア独立のスローガンになった「ウジヤマ」（共同体）を象徴する群衆をあげることが出来る。一本の黒檀を巧みに彫り何十人という人物像がピラミッド状に並ぶ見事な作品だ。

又マコンデ族が生活圏を求めて北上し、ある集団はケニア国境周辺で特異なマサイ族と接触、その夫婦像を彫刻したものや、ダルエスサラーム周辺に定着した集団は、タンザニア、ザンビア間の鉄道敷設のため集団異動した中国人より見ざる、聞かざる、言わざるの三匹の猿を彫り、又、漁師の漕ぐ舟、さまざまな動物、果物、木皿、コーヒー茶碗セット、更にはキリスト教の影響を受けたイエス降誕の像、マリヤ像、十字架、燭台等々正に多種多様の作品を産み出している。

ダルエスサラーム市の北十キロに「ムエンゲ」と呼ばれる部落がある。そこにはおよそ百軒ものマコンデを売る店が並んでいる。店といっても掘立小屋式だが、どの店にも足の踏み場のない位、色々な作品が陳列されている。前の広場の木影や店の裏手には、沢山のマコンデ族が思い思いにノミを振るって彫刻に励んでいる。時折り日本の船が港に入るが、一番希望の多いのはムエンゲ村での買物である。値段は確かについているが全て交渉次第で、時には半値位になることもある。とは申せ、最近、とみに増えた外国人の客に値段はグッと高くなってきている。勿論、市内にもマコンデ彫刻を売る店は多い。

人伝てに聞いたことだが、日本でも1970年に開かれた大阪万国博覧会に初めてマコンデ彫刻が紹介され人気を呼んだ由。極く最近まで名古屋のある収集家がマコンデ美術館を建て、作品を多数陳列していたようだが、事情あって三重県のどこかに移転されたと聞いて残念に思っている。